利活用
コース

佐田岬灯台利活用推進プロジェクト

実施団体名：佐田岬灯台利活用推進コンソーシアム
対象灯台：佐田岬灯台（愛媛県西宇和郡伊方町）

企画概要

企画概要

四国最西端という僻地を逆手にとり佐田岬灯台の旧官舎跡地に官舎を復元し、喧噪から隔絶された”最果ての時間と空間を提供”する「ちいさな灯台ホテル」のサービス提供を目指す。
「灯台ホテル」を観光のシンボルとして、宿泊滞在者向けの「灯台守追体験」等の付加価値を提供するため、地元高校と連携したユース世代のガイド養成等、人材育成にも取り組み、持続可能な事業とする。

参考情報

最果て時間と空間を堪能する
コンセプト型「灯台ホテル」を構想

四国最西端・日本一細長い
半島の先端にある佐田岬灯台

限界集落にあり、人気のコンセプトホテル
旅の「目的地」になる宿

一日約1分間の特別な時間
“エメラルドタイム”

元灯台守・阿部富士男氏と
追体験コンテンツ開発

数々の地域連携を行う三崎高校は
「佐田岬の宝」。コンシェルジュ機能を担う

調査事業の成果を今年度事業に生かす

昨年度の調査事業を経て、点灯直後の約1分間だけ見られる「エメラルドタイム」や、
元灯台守・阿部富士男さん(92)のインタビューから得られた当時の灯台官舎での暮らしぶりなどの
情報を基にした「灯台守の追体験コンテンツ開発」など、新たな魅力を発掘した。

地元自治体、高校、海上保安部との良好なパートナーシップ形成

コンソーシアムの結成においては、伊方町、第一地銀の伊予銀行、佐田岬半島ミュージアム、
三崎高校などが参画。特に伊方町は、今年度事業費の一部出資にあたり町長の判断で
急遽9月補正予算を組んで予算を捻出するなど本気度が現れている。
また、コンソーシアムには参画していないが灯台を管轄する松山海上保安部の熱量も高く、
官舎跡地の活用においては全国の事例を収集しながら密な意見交換を継続的に行っている。
ハードルの高い官舎跡地でのハード整備だが、地域一体となりプロジェクトを推進する体制が整った。

達成目標

**2023年度、旧官舎跡地の土地調査・整備計画作成・実現可能性調査完了。
2025年度に「灯台ホテル」整備開始を実現するため一歩目を踏み出す。**

企画運営パートナー

企画パートナー（Plan / 計画）

1 佐田岬Sプロジェクト　理事長　宇都宮圭

地元佐田岬の活性化に己の全てを捧げる。
自治体や高校からの信頼も厚い。将来的な事業者候補。宿泊事業による収益化

2 伊方町内の飲食店、道の駅、宿泊施設事業者など

観光客の町内滞在時間が増えることによる顧客増、売上げ増

3 佐田岬半島ミュージアム

灯台関連の展示、イベント実施、
グッズ販売など灯台文化の発信拠点化による来館者増

4 愛媛県立三崎高等学校

地域学習としての佐田岬灯台に関する教育機会の享受、
町内の新たな雇用になり得る灯台関連人材の育成

5 伊方町

佐田岬灯台を活用した観光プロモーション、地域活性化

計画よりも多くの町民・事業者が活動に参加

1 佐田岬Sプロジェクト理事長　宇都宮圭 》 コンソーシアム代表としてコアで活動

コンソーシアム代表を務め、今年度事業の活動の中心に。
伊方町や三崎高校、地元団体との調整など

2 伊方町内の飲食店、道の駅、宿泊施設事業者など 》

道の駅「伊方・きらら館」
町内飲食店「まりーな亭」
町内旅館「杉山旅館」
地元漁師など

ソフト事業「燈人育成プログラム」における灯台シンポジウムや
夜間の灯台学習会に延べ20名程度が参加。次年度、燈人に認定予定。

3 佐田岬半島ミュージアム 》 副館長兼主任学芸員 髙嶋嶋賢二学芸員、前田美和学芸員

昨年度調査事業を活用した灯台関連の展示、シンポジウムの開催、
グッズ販売、燈人育成プログラムにおける講師担当、研究者の視点からの助言など

4 愛媛県立三崎高等学校 》 校長、副校長、生徒約15名

燈人育成プログラムに延べ15名が参加。
灯台キャラクター制作においては、生徒発案のキャラクターをグッズ化。

5 伊方町 》 高門町長、濱松副町長、観光商工課

全体事業費の一部を負担いただくなど、積極的に参画。
また、航路標識協力団体への指定を活用した、灯台学習会の際の灯台開放など。

良かったこと

①～⑤のパートナーについて、
当初の計画以上に積極的に携わっていただく結果となった。
特に、町内の灯台関係人材「燈人」の育成プログラムにおいては、
佐田岬半島ミュージアムのサポーターや地域おこし協力隊、
地元の漁業者さんにも興味を持って頂き、
活動の輪を広げることができた。

三崎高校との連携について、
佐田岬灯台に強く興味を持つ高校生人材が生まれた。
次年度、三崎高校の学科が普通科から
「地域共創科」に変更となることから、今年度以降の連携に期待が持てる。

反省点・改善案

プログラムの計画から実施までの告知期間と告知手段が十分でなく、
町民や地域団体全員に案内を行き届けることが出来なかった。

燈人の育成については、
今年度はプログラムに参加するところまでに展開は留まった。
次年度事業として、燈人の認定と具体的な活動機会の創出まで進めていきたい。

事業活動として
何をするのか

～価値を提供する源泉となる活動～

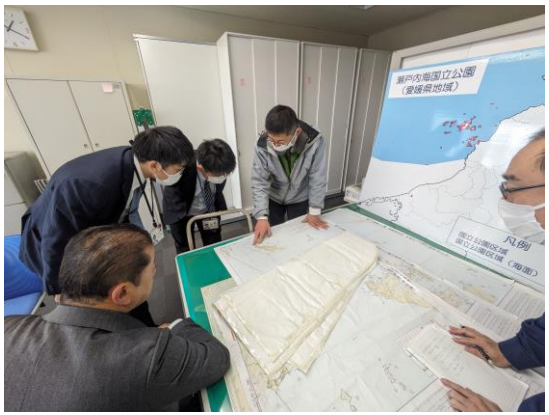
01

【ハード事業】
高付加価値宿泊施設の整備計画調査

【ハード事業】高付加価値宿泊施設の整備計画調査

官舎跡地の土地調査・払下げフローの整理・許認可ルールの確認

官舎跡地の土地調査を実施。
また、四国財務局へ出向き官舎跡地の払下げフローを確認。
さらに、環境省出先機関に出向き、
瀬戸内海国立公園内の開発における許認可ルールを確認。



調査結果を踏まえた整備構想の作成

土地調査や許認可ルールを押さえたうえで、
県内で地域一体となった宿泊施設の設計実績のある
建築設計事業者と連携し整備備構を作成。

ハードルの高いハード整備事業を一段ずつ進める

◇関係省庁の訪問時には伊方町や松山海上保安部職員も同行。共通理解を前提に進めることができた

◇整備構想は3つのフェーズで考えており、町民と一緒に進める設計を描く

土地調査から着手したハード事業。
許認可ルールを整理、構想を描き次のステップへ。

1 土地調査

・官舎跡地の土地調査を実施し、平面図を作成。
・旧官舎跡地は上下の2段に分かれており、
土地面積は２面合計で710㎡程度であることが分かった。（フットサルコート程度）

2 払下げフローを整理

・松山海上保安部とコンソーシアムメンバーで四国財務局を訪問し、
官舎跡地の活用に向けた払下げフローを整理した。
活用には、①貸付と②払下げの2パターンがあるが、貸付の場合は一年ごとの更新が
一般的かつ返却時の原状回復が条件となりハード整備は難しい。
よって、払下げパターンで進めることを念頭に関係者との協議を進めている。

3 国立公園内の開発における許認可ルールの確認

・松山海上保安部とコンソーシアムメンバーで
中国四国地方環境事務所松山自然保護官事務所（環境省出先機関）を訪問し、
瀬戸内海国立公園内の開発における許認可ルールを確認した。
①自然公園法施行規則に沿った整備と、②佐田岬園地事業の附帯施設
（休憩所、展望台、野外運動場等）として事業認可を取る２つの方向性を確認した。

4 官舎跡地におけるハード整備構想の作成

・上記の払下げフロー、許認可ルールを確認したうえで、ハード整備の構想を作成。
事業設計は、県内で分散型ホテル「ニッポニアホテル大洲城下町」の
設計管理実績のあるボールアーキテクチャ合同会社と連携して実施。
ハード整備は3つのフェーズで段階的に進めることを考えている。
最初のフェーズは灯台と官舎の利活用。二段ある官舎跡地の一段目に官舎を復元した
多目的な休憩所施設、２段目には灯台を見ながらデイキャンプやピクニックを楽しめる
芝生広場を整備。施設の使用用途としては、飲食の提供、図書館や展示室、
また将来的には宿泊も出来る多目的に使用できる施設として整備したい。
次に、灯台の周辺環境を生かした再整備。戦争遺産である砲台跡や
かつてイセエビの畜養に使っていた畜養池など、既にある施設を、
例えばウイスキーの試飲場所としたり、畜養池を海の環境学習や安全講習として
利用できる天然のプールに再整備する構想を描いている。そして、最終的には灯台を
起点とした佐田岬半島全体に好循環を生む仕掛けとする。経済を動かし、文化を守り、
観光につなげる。このサイクルを回していくことで町民一人ひとりが
このプロジェクトの担い手、すなわち「燈人」として活躍する。

良かったこと

・ハードルの高いハード整備において
関係省庁の確認を取りながら
一つずつ課題をクリアにした

・県内で実績のある建築設計事業者と連携し、
灯台とその周辺環境、また佐田岬半島全体に
波及効果が期待できる効果を事業構想にまとめた。

反省点・改善案

・当初計画していた「高付加価値宿泊施設」だと、許認可のハードルが上がり、
開発可能な面積内では採算化が難しいと判断し多目的な用途使用出来る
休憩所施設のハード整備へ方向性を変更した。

・自治体との認識のすり合わせや関係省庁への確認など、できる限り丁寧に
進める必要があり、事業構想を描くまでに多くの時間を要した。

02

【ソフト事業】
佐田岬燈人育成プログラム

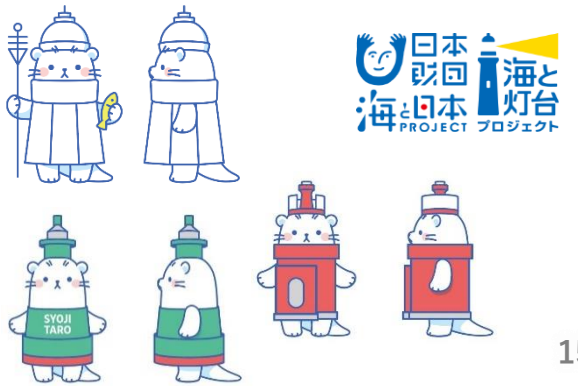
【ソフト事業】佐田岬燈人育成プログラム

佐田岬灯台の魅力を最大限の熱量で発信できる人材を「燈人」と定義し、
シンポジウムや夜の灯台学習会、灯台キャラクター制作等の育成プログラムを実施

【展開①】11月4日（土）開催
佐田岬灯台シンポジウム
＠佐田岬半島ミュージアム

【展開②】11月19日（日）開催
燈人育成プログラム1回目
夜の灯台開放＆灯台学習ガイドツアー

【展開③】1月20日（土）開催
燈人育成プログラム2回目
佐田岬半島に10ある灯台の
キャラクター化



【ソフト事業】佐田岬燈人育成プログラム

1 佐田岬灯台シンポジウム ～歴史を学び未来を照らす～	・パネリストとして元灯台守の阿部富士男（92）さん、松山海上保安部職員、佐田岬半島ミュージアム学芸員、コンソーシアム代表が登壇。 それぞれの立場から活発な意見交換が行われた。 阿部富士男さんのお話を直接聞ける貴重な機会ということもあり、伊方町高門町長を始め、多くの町民が拝聴に訪れた。シンポジウムの中で、阿部富士男さんからは以下の発言があり、今後の灯台利活用に期待を寄せた。 「観光という面から、灯台官舎跡地を活用しない手はないです。昔は水がなくて苦労したが今は水道が通っている。」「可能性があるのなら官民一体となって地元の人たちが努力すべき。泊まれる灯台、登れる灯台を是非実現したい。 それが過去に灯台守として勤務した私の願いです。」
2 燈人育成プログラム１回目 夜の灯台開放＆エメラルドタイム学習ガイドツアー	・三崎高校生徒、佐田岬みつけ隊（佐田岬半島ミュージアム サポーター）、地域おこし協力隊、旅館経営者、道の駅事業者、地元漁師（海士）など、将来の燈人（あかりびと）候補者ら約40名が参加。 点灯後数分間だけしか見られない「エメラルドタイム」や佐田岬灯台周辺の自然環境、灯台の構造について、講師を務めた高嶋学芸員によるガイドツアーを通して学習。
3 燈人育成プログラム２回目 三崎高等学校生徒による 佐田岬半島に10ある灯台のキャラクター化	・三崎高校の生徒が佐田岬にある10の灯台のキャラクター案を作成。 今後、グッズ化し道の駅や佐田岬半島ミュージアムショップで販売。

良かったこと

「燈人育成プログラム」において、
自治体や地域団体の呼びかけもあり想定よりも多くの関係人材に
関わって頂き活動の輪を広げることができた。
「佐田岬灯台は町のシンボルで観光客に説明したいが
実は詳しく知らない観光系事業者も多いのでは」
といった声があった。

三崎高校との連携について、佐田岬灯台に強く興味を持つ
高校生人材が出て来た。次年度、三崎高校の学科が
普通科から「地域共創科」に変更となることから、
今年度以降の連携に期待が持てる。

反省点・改善案

プログラムの計画から実施までの告知期間と告知手段が十分でなく、
町民や地域団体全員に案内を行き届けることが出来なかった。

燈人の育成については、
今年度はプログラムに参加するところまでに展開は留まった。
次年度事業として、燈人の認定と具体的な活動機会の創出まで進めていきたい。

顧客ターゲットと
提供するベネフィット

顧客ターゲット（Plan / 計画）

メインターゲット

1 【ハード事業】高付加価値宿泊施設の整備計画調査

松山市、宇和島市、大分市など片道3時間以内の近隣都市圏に居住するアッパー層
※個人、家族、友人など小人数単位での宿泊を楽しめる方

2 【ソフト事業】佐田岬燈人育成プログラム

伊方町内高校に通う三崎高校生、伊方町地元住民、隣接する市町の住民

サブターゲット

3 【ハード事業】高付加価値宿泊施設の整備計画調査

首都圏に居住するアッパー層、外国人観光客
※共通条件
・マイカー、もしくはバイク所有者
・松山市内から片道2時間半の
　ドライブを楽しみたい方

顧客ターゲットと提供するベネフィット

1	【ハード事業】 高付加価値宿泊施設から 多目的に活用出来る 休憩所施設に事業を変更。 ターゲットを再度設定する 必要がある。	＜メインターゲット＞ 松山市、宇和島市、大分市など片道3時間以内の近隣都市圏に居住するアッパー層 ※個人、家族、友人など小人数単位での宿泊を楽しめる方 ＜サブターゲット＞首都圏に居住するアッパー層、外国人観光客 ・高付加価値宿泊施設から多目的に活用出来る休憩所施設に事業を変更。 これにより、顧客ターゲットを再度設定し直す必要がある。
2	【ソフト事業】 計画通りのターゲットに アプローチ出来た	＜メインターゲット＞ 伊方町内高校に通う三崎高校生、伊方町地元住民、隣接する市町の住民 ・計画していた通りのターゲットにアプローチ出来た。 特に、佐田岬みつけ隊（佐田岬半島ミュージアム サポーター）、 地域おこし協力隊、旅館経営者、道の駅事業者、地元漁師（海士）など、 将来の「燈人」候補が多く関わってくださった。
3	新たな顧客ターゲットの 設定と再調査・検証	・ハード整備に伴い、新たなメインターゲットを設定 次年度事業において、新たに設定した顧客ターゲットが適正か追加調査と検証を行いたい

良かったこと

【ソフト事業】燈人育成プログラムのターゲット設定については
狙い通りで、コアとなる三崎高校生徒と町内観光系事業者に加え、
地域おこし協力隊や異業種（漁業者）などにも加わって頂き
展開に広がりをもたらすことができた。

反省点・改善案①

ハード事業の方向性転換により、
新たな顧客ターゲットを設定する必要があるが
構想作りまで進めるのに時間を要してしまい、
新たなターゲット設定まで至らなかった。

反省点・改善案②

今後ハード事業を進めるにあたり、
ターゲット設定は非常に重要。
新たなターゲット設定と調査検証を早急に進める必要がある。

チャネル
～顧客に事業の価値を届ける経路、確認する経路～

認知の獲得

高付加価値宿泊施設の整備については
「佐田岬灯台官舎復元プロジェクト」
と銘打ち、当時の写真を提供頂くなど
地域住民と関わりを持ち認知を
広めながら進める。
また、イベント実施時における
テレビ・ラジオCMの放送、
ポスター・チラシなど広報物の作成、
SNS発信など

申込みの獲得

南海放送ホームページの
イベント情報から申込みページに誘導
（佐田岬観光公社、
もしくは県内旅行会社を想定）

リピーターの獲得

参加時に、リピーター特典を付与

【認知の獲得】
伊方町内全世帯に配布される「広報いかた」に
官舎写真募集キャンペーンのチラシ挟み込みを実施。
プロジェクトの広報を行った。

その一方で、下記施策においては十分な取り組みが出来なかった

1　リピーターの獲得	**燈人育成プログラムについて、 複数回参加して下さったメンバーもいたが、 継続的に参加して下さった方々に対して、 何らかの特典を付与できなかった。**

良かったこと

- ソフト事業に関して、
すべての取組みにメディアを誘致し
年間の活動を県内に広く発信することができた

- 高齢者が多い伊方町において、
町民に確実に情報を届ける施策として、
町内全世帯に配布される「広報いかた」への
チラシ挟み込みを行った。
官舎写真募集キャンペーンの情報を掲載し、
本プロジェクトの広報を行った。

反省点・改善案

燈人育成プログラム参加者へのアンケートを実施したが、
アンケート項目が十分とは言えず改善の余地があった。
今後は、より参加者の意見を丁寧に集約したい。

顧客との長期的な関係構築のために実行できる施策

顧客との長期的な関係構築のために実行できる施策（Plan / 計画）

佐田岬半島ミュージアムでの発信

灯台文化の発信拠点として、
プロジェクトに関連する展示を行ったり、
双方向のコミュニケーションツールを
設置したい

イベントレポートの発信

事業の進捗やイベントレポートなど、
灯台に関する情報を積極的に発信する

SNSでの情報発信

四季の変化や季節の話題などを
SNSで情報発信。
「また来たい」と思ってもらえるように
魅力的な情報を発信

顧客との長期的な関係構築のために実行できる施策（Do 実行／実際どうだったか）

1 佐田岬半島ミュージアムでの発信

町内10の灯台ドローン映像を編集し展示で放映

昨年度調査事業で撮影した町内に10ある灯台のドローン映像を再編集し
佐田岬半島ミュージアムの展示室で放映。

2 イベントレポートの発信

ソフト事業の取組みをイベントレポートとして発信

灯台シンポジウムや燈人育成プログラムの様子を
プレスリリースをして広く発信した。

3 SNSでの情報発信

8000名超のフォロワーがいる「海プロえひめ」Xアカウントで積極的な情報発信

新規アカウント立ち上げ→フォロワー獲得から始めるのではなく、
既に8000名のフォロワーがいる「海と日本プロジェクトinえひめ」の
Xアカウントで積極的な情報発信を行った。

良かったこと

伊方町に新たにオープンした
歴史文化の研究・情報発信拠点である
佐田岬半島ミュージアムと連携し、展示室内で放映。
昨年度調査事業の成果物である
灯台ドローン映像を有効活用することができた。

反省点・改善案

SNSでの情報発信については、海プロえひめでのアカウントに
集約したが（X、インスタグラム、ニュースサイト）他の海関連情報に
埋もれてしまった感は否めず、再考の余地がある。

事業に必要なリソース
～人、物、情報、許認可～

01

人、物、情報

事業に必要なリソース（Plan / 計画）

人

事業企画プロデューサー
事業進行ディレクター
イベント運営スタッフ
広報スタッフ
経理スタッフ
ガイド
企業・団体
伊方町
松山海上保安部

物

ポスター・パンフなど広報物
備品
グッズなどのPRツール
灯台の魅力を伝えるコンテンツ

情報

調査事業で得られた佐田岬灯台の歴史や役割、物語

事業に必要なリソース（Do 実行 / 実際どうだったか）

1　人

地域一体となった組織を結成できた

- 事業企画プロデューサー　宇都宮圭（コンソーシアム代表：佐田岬Sプロジェクト）
- 事業進行ディレクター　田中拓希（コンソーシアム：南海放送）
- イベント運営スタッフ　阿部直美（コンソーシアム：南海放送）
- 広報スタッフ　池田奈菜子（海と日本プロジェクトinえひめ事務局）
- 経理スタッフ　山本英利（コンソーシアム：南海放送）
- ガイド　髙嶋賢二学芸員、前田美和学芸員（コンソーシアム：佐田岬半島ミュージアム）
- 企業・団体　佐田岬みつけ隊、地域おこし協力隊、道の駅 伊方・きらら館など
- 伊方町　高門町長、濱松副町長、観光商工課（コンソーシアム）
- 松山海上保安部　交通課　菅原課長　（連携団体）

2　物

計画通り、事業実施に必要な備品や PRツールを揃えることができた

成果報告会でも着用した佐田岬の燈人パーカーなど

3　情報

計画通り、事業実施に必要な佐田岬灯台の歴史や役割、物語を収集、整理することができた

収集、整理した情報をイベントチラシやミュージアム展示用の動画作成に活用した。

良かったこと

- 想定よりも多くの関係者に積極的に活動に携わっていただくことができた
- 備品やPRツールをそろえたことで次年度以降もスムーズに継続できる準備が整った

反省点・改善案

伊方町に携わる多くのメンバーを巻き込めた一方で、
全ての地域団体に十分なお声掛けをすることが出来なかった点は
次年度改善したい。

02

許認可

許認可

海上保安庁	国有地と灯台敷地内の使用許可
愛媛県	国立公園内の開発に関する確認

事業に必要なリソース（Do 実行 / 実際どうだったか）

1 許認可

ハード整備の準備として関係省庁を訪問し情報収集を行った
今年度事業においては、申請が必要な案件はなかった

＜松山海上保安部＞
コンソーシアムメンバーによる関係省庁の訪問に同行頂いた。
官舎跡地の活用事例について、他エリアの海上保安部にも問い合わせ頂き
情報収集に多大なお力添えを頂いた。

＜愛媛県＞
愛媛県自然保護課を訪問したが、官舎跡地は瀬戸内海国立公園内なので
環境省出先機関の担当者様をご紹介いただいた。

※他、四国財務局、中国四国地方環境事務所松山自然保護官事務所を訪問し情報収集

收支報告

佐田岬灯台利活用推進プロジェクト

①初期投資（イニシャルコスト）	②運営費（ランニングコスト）	③収益
【A：ハード事業 高付加価値宿泊施設の整備計画調査】 土地調査実施費　1,200,000円 消耗備品費　220,000円 整備計画・構想設計（パース）作成費　1,250,000円 ※現地調査にかかる人件費含む 土地調査・整備計画作成交通費　150,000円 広報物作成費　250,000円 人件費（実施体制構築、知識習得等）　480,000円 **【B：ソフト事業 燈人育成プログラム】** プログラム運営マニュアル作成費　660,000円 灯台キャラクターグッズ開発費　400,000円 人件費（初年度実施体制構築、知識習得等）2,450,000円 ※交通費含む 動画制作費　660,000円 PRツール制作費　700,000円 諸経費（講師派遣費、保険加入費など）95,000円 Web、SNS等運用管理費　480,000円	**【A：ハード事業 高付加価値宿泊施設の整備計画調査】** 調査計画作成段階のため　0円 **【B：ソフト事業 燈人育成プログラム】** プログラム運営管理費　350,000円 人件費（開催準備、運営費）440,000円 ※交通費含む 広報ツール制作費　180,000円 諸経費（講師派遣費、保険加入費など）45,000円 消耗備品費　110,000円	伊方町負担金　1,000,000円 ※計画にあった灯台ツアーは燈人育成に変更したため0円、灯台キャラクターグッズは今後販売のため現状0円
①8,775,000円	**②1,125,000円**	**③1,000,000円**

③収益－②運営費	マイナス 125,000円

あきらかになった課題と
その解決のための施策案

A.利活用事業（コンテンツ）について

課題

【ソフト事業】燈人育成プログラムの取組みについて次年度は具体的な活動機会創出、収益化を目指す

燈人育成プログラムにおいて、想定していたよりも多くの人材を
巻き込むことに成功したが、燈人の認定や具体的な活動機会の創出、
また収益化まで進めることが出来なかった。
次年度はプログラム内容を精査し、
一年間の活動ロードマップをしっかり描いたうえで事業のスタートを切りたい。

施策

◎「燈人認定試験」を含めた年間活動ロードマップの作成

◎「燈人」の認定とその後の活動機会創出

◎「燈人」収益化の仕組み作り

B.実施体制について～熱量をもった主体となる団体や個人を巻き込むこと～

課題

事業の安定的な継続のために、専門的な知識を有する事業者やサポート企業を巻き込む

ハード事業については、灯台周辺の整備だけではなく将来的には
佐田岬半島全体の地域振興まで専門性の高い、また広い視点で取り組むことが必要。
現コンソーシアムには、この分野の専門的な事業者がいないため、
次年度は建築設計事業者と深く連携しながら事業を行う。
また、ソフト事業の燈人育成については活動をサポートしてくださる
可能性がある企業にアプローチする。

施策

◎専門性の高いハード整備に一緒に取り組む建築設計事務所の巻き込み

◎燈人育成プログラムをサポートしてもらえる企業へのアプローチ

C.収支について～運営費と収益を将来にわたって均衡させること～

課題

燈人による収益化の仕組み作りと灯台キャラクターグッズの販路拡大

今年度は伊方町負担金以外の収益が得られなかった。
次年度は燈人の具体的な活動機会を作り、収益を得られる仕組みを作る必要がある。
また、灯台キャラクターグッズについては現在予定している施設以外でも
販売して頂けるようアプローチする。

施策

◎「燈人」収益化の仕組み作り

◎灯台キャラクターグッズの販路拡大、売り上げ増

今後の展開予定

シンポジウムに登壇した元灯台守・阿部富士男さんは
「（官舎跡地を活用出来る）可能性があるのなら官民一体となって地元の人たちが努力すべき。
泊まれる灯台、登れる灯台を是非実現したい。それが過去に灯台守として勤務した私の願いです」
と思いの丈を語りました。灯台守の記憶と想いを継承し、灯台官舎跡地を再び海と人が交わる空間に。
今後も、官舎復元を目指すハード事業、燈人育成を行うソフト事業の両輪でプロジェクトを推進していきます。

【今後の計画】ハードとソフト、両輪での事業展開しながらステップアップを図る

来年度も伊方町の燈人と共に佐田岬灯台の利活用を推進していきます

【ハード事業】

日本財団様と相談しながら
具体的な事業計画の策定
- 灯台を訪れる観光客や地元住民の顕在/潜在的な需要の追加調査と検証
- 官舎跡地の払下げにかかる土地費用について複数の鑑定士による予備調査を実施、想定価格の算出

【ソフト事業】

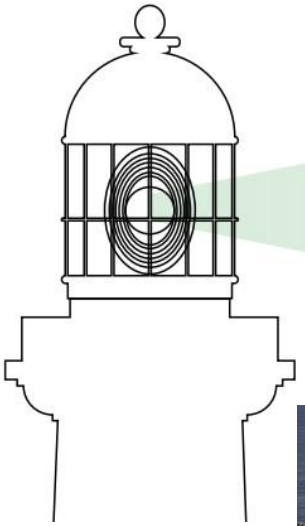
- 佐田岬灯台に関する知識習得を目的とした「佐田岬灯台 燈人検定」の実施
- 町内に様々な立場で点在する「燈人」の活動機会を創出する
- 三崎高校生と連携した継続的な取り組み

資料

ハード事業：佐田岬灯台旧官舎跡地　現時点の事業構想

設計事業者：ボールアーキテクチャ合同会社
設計管理実績：分散型ホテル「NIPPONIA HOTEL 大洲 城下町」、道後温泉 葛城 琴の庭など

持続可能な利活用とするために、段階を経て進めていく事業とします。
段階的に進めることで、地域の人たちに対して活動を徐々に浸透させ、地域の機運を高め、
地域のひとりひとりがプロジェクトの"語り手"となることを期待します。
灯台の利活用にとどまらず、地域の課題を踏まえた活動を、地域の人たちが主体となり
現在及び将来の経済、社会、環境への影響を考慮した活動となることを期待します。
各フェーズを達成することで、地域に"文化・観光・経済"の好循環が生まれることを期待します。
結果的に、佐田岬灯台の保全を継続させ、灯台を次世代へ継承する目的を達成することが出来ると考えます。



第1フェーズ：灯台と官舎の利活用

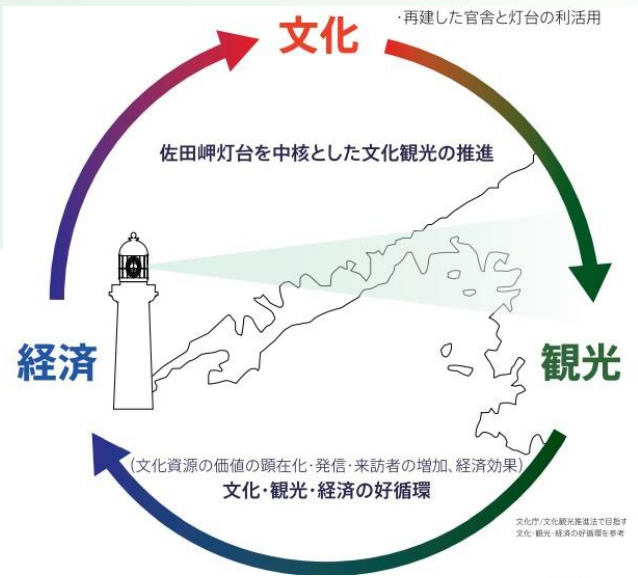
・官舎の再建
・再建した官舎と灯台の利活用

第2フェーズ：周辺環境を活かした魅力的な場所の整備

・蓄養池跡の利活用
・豊予要塞 洞窟式砲台跡の利活用

蓄養池跡の利活用イメージ

豊予要塞 洞窟式砲台跡の利活用イメージ

第3フェーズ：周辺地域の整備

・灯台の利活用により生まれた人の流れを周辺環境を充実させることで、地域に"文化・観光・経済"の好循環を創出する。